

## 46 ペテロもマタイの所在を知っている。

— 《聖マタイの召命》の謎は解けている—

真鍋友範

2023・2024

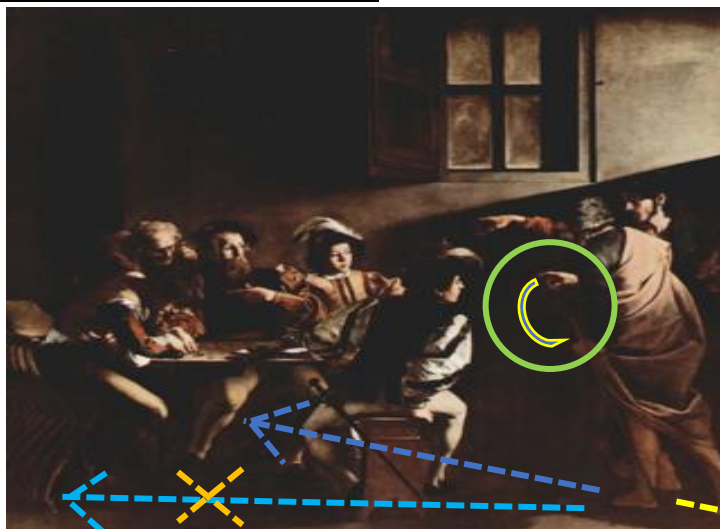
まず、確認したい点は、カラヴァッジョという画家は、精密な写実主義の画家であり、それも極端に正確さを求め、ポーズカタログに相当する事前スケッチ集を準備して描いたルネサンス期の画家とは異なり、直接モデル役にポーズをとらせ、描いた画家であった、という事実だ。

この事実は、カラヴァッジョの描いた《聖マタイの召命》に於いて、【呼ばれた人物が誰であるか、を正確に導き出す重要な手段】なのだ。

では、改めて《聖マタイの召命》をみよう。

ペテロはイエスの一番弟子であり、イエスに従って旅した人物だ。イエスの直近に居る人物だ。

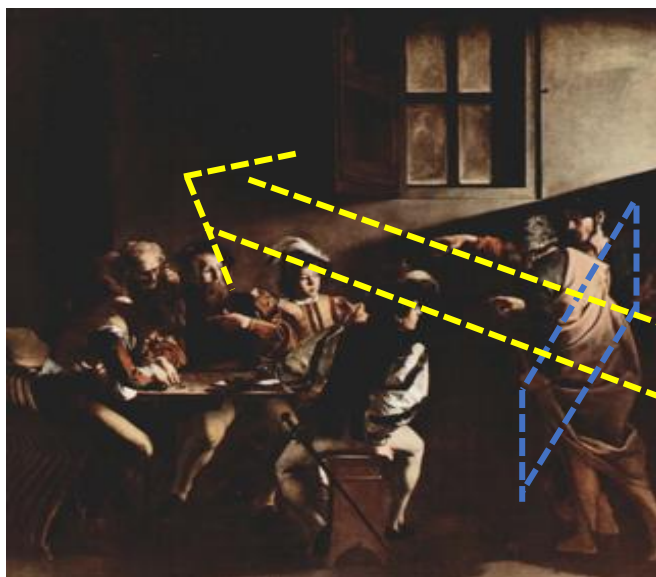
描かれている状況は、次の通りだ。背中をこちらに向けて座る収税者の仲間の一人は、突然の来訪者の一人であるペテロに向かって質問している。ペテロは、まっすぐ体をマタイに向けた上で、右手首を小さくて回して【向こう側の人物だ】と答えている。(グリーンの半円) 残念ながら、【向こうの人】のポーズだけでは、相手は特定できないだろう。



次に、ペテロの両足の位置に注目しよう。

両足の中心軸を補助線（イエローの線）として描き加えると、その方向軸（ブルーの線）は若い収税人には向かわず、眼鏡の老人の収税人に向かって伸びている。【ここで重要な点なのは、マタイの向ける意識が、決して若い収税史に向かっていない、という事実だ。】

次に、ペテロの背面の角度に注目する。



ペテロの背面（ブルー）から、正面側に交錯線（イエローの線）を伸ばすと、その線の向かう方向には、若い収税人は存在しない。

ここでも、【若い頃収税史がマタイであるというドイツ学派の学説は否定される】ということだ。

これらの事実は、イエスはもちろんだが、ペテロもまた【眼鏡の収税人】がマタイか知っていたことになる。（少なくとも、カラヴァッジョは、ペテロのモデル役に対し、【眼鏡の収税人に向かう姿勢】のポーズを指示している。）

仮に、ペテロが俯いた収税人に向かって、【向こう側の人を呼んでいると答えるポーズ】を取っている姿勢であるなら、ペテロの側面つまり左肩は見えても、背中は、ほぼ見えない筈なのだ。しかし、【実際にはペテロの背中はしっかりと見えている。つまり、ペテロは眼鏡の収税人を見ている】姿で描かれている。

では、もう一度この場面を再構築して締めくくろう。

窓の外から座っているマタイを見たイエスは、弟子たちと共に暗い収税所の部屋に入ってくる。いち早くイエスたちの姿を確認した中央のヒゲ男は二段階ポーズで質問する。「お探しの人は、私ですか、それとも隣のメガネの人ですか」と、まず親指を自分の胸に向け、続けて人差し指を隣に向ける。

イエスは、左手の平を広げて、ヒゲ男からの質問を受容する合図を送り、右足を左側に一步進めて視点を移動して、メガネの男の顔が見える位置に立ち直す。次に【右手を回して】、質問者であるヒゲ男の向こう幼名側にいるメガネの男を呼ぶ。「私に従いなさい。」（同時に、父なる神からの、啓示の点光が、マタイの額の上側に到達し、イエスを導く）

この一連のやりとりと並行して、ペテロと納税人の仲間である若者との会話が進行する。「誰をお探しですか」という納税者仲間の若者の質問に対し、ペテロは【向こう側の男に向き合い】、【力を抜いた手の手首を回し】ながら「向こうの男だ」と答える。

カラヴァッジョの優れた描写才能は、余すことなく、この【向こう側の男と向き合ったペテロの姿】を描き切っている。

.....

蛇足1 通りすがりに窓の外から見えたマタイは、最初には座っていたが、眼前での金銭のやり取りを監視する為、ヒゲ男と部下の若い子収税人との間の税金の授受に注意を向けるために一旦立ち上がり、さらに【腰を45度に曲げ、机に寄りかかった姿勢】へと展開している。つまりメガネの男は、立っている2点支持姿勢ではなく、【机に寄りかかる3点支持姿勢】だ。当然イエスに呼ばれたら、立ち上がる必要がある姿勢だ。【マタイは座っていないが、立っている姿でもない。】\*この説明を疑うなら、実際にメガネの男と同じポーズを取ることをお勧めする。必ず【右手で体幹を支える姿勢になる】だろう。

この【絶妙な表現力】を追体験できなければ、あなたは、【カラヴァッジョの本質的リアリズム表現】を理解した、とは言えないのだ。

蛇足2 【イエスは指差している】と平然と解説する、17世紀のベッローリ評論を信じるカトリック教美術史学者、あるいは西洋美術史ドイツ学派は、誤った解説を盲信し、直接作品を見ない人達なのだ。絵痴\*かもしれない。

\*絵痴（えち）とは絵画音痴の意味。音痴の対語。小生の造語